

■実録 大正十二年の東京メーデー

ハギシン

大正十二(一九二三)年五月一日、第四回メーデーが芝公園でひらかれた。

前夜、社会主義者が深川富川町で立ん坊を雇い、浅草公園内でピラをまいた。立ん坊は片っ端から警視庁に引っぱられた。午前〇時半、中名生幸力・橋浦時雄・浦田武雄・近藤栄蔵ら六〇人近くが検束された。

芝公園は二千人余の警官が垣を作った。曇り空がようやく晴れてきた。「メーデー実施」「八時間労働」「生存権の確立」の大旗をたてた信友会・交通労働・南葛労働の労働者が、乱闘に耐えるりりしい軽装でくりこんだ。会場には菜葉服や法被姿の三千人余りが集まった。百本以上の組合旗がはためいた。十時半、芝浦労組の半田利助が中央演壇に立って開会の演説をした。次で造船船工労組の高山治郎市が決議文を朗読し、信友会の野村孝太郎、時計工の渡辺満三とそのほか十数人が演説した。演説が進むにつれて、検束者がふえてきた。それを見ようと弥次馬がたかる。突然、演壇にかけあがって赤色のピラをまいた者がいた。押寄せる警官隊と労働者の乱闘に

なる。目星しい幹部は騒ぎのたびにどんどん引っこ抜かれて行つた。正午頃には会衆は一万人をこした。

正午をちよつと過ぎたとき、朝鮮人の孫永春が長髪を風になびかせ、「我々は労働者だ。無産者には国境はない」と演説した。警官が孫の髪をつかんで引摺りおろした。「朝鮮人が何が悪い」と五、六がかばうと、「進め！」の号令で警官隊が突撃。演壇はメリメリツと押潰され、血まみれの大乱闘になった。帽子を引きちぎられる警官もいた。孫は四人の仲間と一しよに引っぱられた。

二月半ばから早高を中退した難波大助は、深川富川町の「第二煙草屋」という木賃宿に住んでいた。メーデー前夜、友人の歌川を泊め、一しよにメーデーを見に出かけた。何か演説してやろうと、大助は考えをまとめている時、この騒ぎにまきこまれて拉致されそうになった。歌川が猛然と警官におどりかかって抵抗し、大助は危うく難をのがれた。

十二時半、四列縦隊でデモ行進がはじまった。検束はますます激しくなった。二人の警官が一人の労働者の両手をねじ上げて地面につきつけるのを見て、田辺監察官が「なるべく外ではやるな、内(警視庁)にしろ、内に」と制するほどの業状であった。

大助と歌川も自由労働組合の旗の下について行進に加

わった。途中の町工場で、昼休みの職工たちが行進を見物しているのを見て大助は、「なぜ休業しないか」とどなりつけた。日比谷公園では、禁止されている革命歌を大声で合唱し、溜飲を下げた。警視庁前で堺真柄が検束された。前夜からの検束を含めて三五六人に達した。行進は御成門→桜田本郷町→警視庁→神田橋と進み、神田で数百人の警官隊がおそいかり、加藤一夫・佐野袈裟児・平沢計七ら三六人が珠数つなぎにされた。奪回しようとする警官ともみ合って大助はつかまえられるが、行列の労働者たちに救われた。昌平橋でさらに三十余人が検束された。松住町から黒門町へきたとき、大助を捕えた警官に見えられて、彼はまたつかまった。だが今度もまた労働者たちが助け出した。のちに山口へ帰郷した大助はこの日の教訓から「一にも団結、二にも団結、あらゆる労働者の団結を組織化せねばならぬ」と決意した。

行進は上野公園にナグレこみ、広場は旗を打ちふる労働者で埋まった。労働歌は嵐のように山内をゆるがした。半田利助が痛烈な閉会の演説をしたのは午後四時半であった。

資料 『国民新聞』『東京朝日新聞』原敬吾「難波大助の生と死」

★野火★

★黒色戦線社が石川三四郎の「ダイナミック」一九二九年一月号より一九三四年一〇月号までを、完全複製した。(A4判251頁 定価三〇〇円)

昭和四年から昭和九年の時期は日本史では満州事変、支那事変とつづく動乱期で、農漁村の窮乏化に加え、ファシズムへなだれ込んだ不安と戦勝気分とテロルの交差する閃光の日でもある。この時石川三四郎は鶴見俊輔氏の言うところの転職をしたのであろう。それが府下千歳村での共学社の経営であった。けれどその前にはフランス仕込みの農園経営が失敗に終り、「自分の考えをまとめるためにノート代りにリーフレットを発行しよう。そして毎月義務的に書かなければならないようにしよう。」としてダイナミックの創刊が構想され、「リーフレットの題名は、フランス語でダイナミックとしよう。そして社会革命の力学的理論、云ひ換えれば解放の哲学を組立てようと思ふ。」として誌名が決定されたそうである。内容は詩、散文、論説、時事解説等多彩で、ルクリュ、アンリネル、カーペンターの略伝、マラテスターのクロポトキン批判等を掲載しているが、スペイン革命の経過記事などは、石川氏の特別なニュースソースから出たものとして貴重だろう。また石川氏個人の思想の流れは宇宙線のクロマチン説

から多元論的調和説。他方虚無から土民芸術論を経て「社会美学としての無政府主義」へ結実して行く成行きは社会の現実と切り結んだ石川氏なりの収穫であったろう。望月百合子氏は「ダイナミック発行のあとさき」で幾つかの興味深い挿話を語り貴重だ。特に「ババがフランス亡命中から主に外国の文献によって研究した古事記」とはどういうものか興味をそえられる。それにしても石川氏の回想にあるという一文はどう考えるのがよいのだろうか。

「：自分の知識、自分の芸術を発表して、世の批評を求め他の共鳴を誘うのはよい、併し自分の道義を権威を以て諸人に説くのは、強権主義の第一歩である。こうした精神的強権主義は多数の同志を集めて一時景気のよい運動を誘起すべく極めて有効ではあるがそれは私の慎んで避けるなければならぬと考えたことであった。ここにアジテーターとエデュケーターとの相異がある。」

しかし大逆事件までの氏はアジテーターであった。石もて追われるようにフランスに逃亡した後の氏はエデュケーターに転じたのである。引用した一文は同時代のアジテーターに向けられたものであると同時に自己の過去にも向けられたものと理解すべきだろう。そしてそこから後半生の氏のアナキストとしての意味をとらえなければならぬ。

(文責はしもと)

★『水俣病センター相思社維持社員をつくる』

水俣病潜在患者の存在さえ否定し、水俣病の問題に終止符を

うちたがっている、チツソはもちろん国・県・市の策動に対する、患者やそれを扶ける人々の闘いの拠点として、昨年四月、「水俣病センター相思社」が設立された。はじめの計画の二倍の敷地に、計画を上回る三棟一〇二坪の建物がたち、患者家庭世話部門、医療部門、殖産部門が設けられ、活発な活動が始められた。「センターは、金さえ出せば文句はあるまいといった傲慢きわまる公害処理対策にたいする、人間の立場からの徹底抗議でもあります。あえていえば、それは高度成長を誇る日本の経済社会、あるいは現代文明そのものの犯しつつある人間破壊にあらがいがら、私たちみずからもう一つの異った人間的な連帯と現実を求めて試みる場所なのです。」(日高六郎) 水俣病に展型的にみられる公害は、人間環境を破壊し、人間性そのものを否定している。これに對して患者たちはその全存在をとうとう闘っている。我々がこの問題に真剣に取り組む、なんらかの態度を示していかないかぎり、「アナキズムの復権」は、一部の知識人の世界での「かけ声」で終わってしまうだろう。なぜなら問題は、思想ではなく、それをなう人間の行動だからである。我々が社会問題に取り組まないかぎり、アナキズムが社会に根をおさすことはない。水俣病の患者たちの闘いに注目しよう。

(江藤)

▼東京水俣病を告発する会―東京都港区西新橋2の8の13第一ビル 青林舎気付

☆

神戸に共同文庫ができました。

かねてからイオムの会の人々は共同文庫のための家をさがしていましたが、この程、みつかつて、クパール社と一緒に活動するそうです。

☆

岩佐作太郎研究会はこしはらく毎週やっていましたが、今後は月一度程、会場等を借りてやることになりました。

☆

『村野四郎が死んだ』(一九七四・二・二死)

一人の詩人が死んだ。

誰もその死を疑がわない。

嶋岡晨のあのだらけにだらけた、理解しようとすらするのではなく、知識として覚えておこうとするだけのアナキズムに対するメモを見たか。

あれを読んだ後、村野四郎の肉声を聞くと耳が洗われる。

詩的アナキズム、虚無の方へと向いていなくてはならなかった自己のそもその存在。悲しくつたって仕方がないのだ。正しき、純粹さを求めようとすればするほど、いいしれぬほどの悲しさを覚えるのだ。アナキズムというのはそういうものだ。自分なんか忘れていたのだ。ただ正しき、純粹さを求め主張する、それを繰返し、繰返し、反省し、反逆し、美しさを求めていくこと。

ひところ村野さんの詩がいやになったことがある。おそら

☆

くいまいやだと思う。あの僕には体験できないようなブルジョワ生活の、その結果としての詩。少年の頃はそれもごく新鮮に映った。自分の意識を極度にまで対象化するのに他在するものを擬似主体として語るその詩。それは僕にはいまままでにないものだったし、作り方もスマートだった。でも僕は貧乏だったし、村野さんが体験の結果としてそれらを作ったことを理解し始めた時、いやな気持ちがそれらの詩の限界として湧いてきた。

村野さんはでもアナキズムを知っていたのだ。深い悲しみ、どこまでも、どこまでも美しさを、同じものではなく、しかもバランスのとれた形、一人で静かにそんなものを追求したり、求めたりしていたのだ。

一人の詩人が死んだ。

アナキズムを知っている一人の詩人が死んだ。

そんなこと、寂しくはない。そういう人がたくさん死んで、そういう人の精神を、一人静かに考えてみる。

アナキズムを知っている、一人の詩人が死んだ。

☆

★自由連合、自由連合新聞の複製版が出版された。本書は戦前の機関紙で一九二六・六から一九三五・七までのものが載せられている。新聞自体について言及すると、二七号以後の部分で実際の発行日と記載された発行日の間に時として著しい差がある。このため文中の日時等について若干の疑義の生ずる部分がある。本書の発行を記念し、三月二日、出版記

念の講演会が催されたそうであるが、私は他の会合のため出席できなかった。であるからこのことについて説明があったかもしれないが、一度文章にして説明して欲しいものだ。なお小松隆二氏の解説中に誤植と思われる部分があることも付記す。

海燕書房刊 一万二千元

☆

★三月六日、東京地方の月例交流会がもたれた。この会で世話人会ができ、三月十日、世話人会が開かれた。この会で交流会について充分話し合われ、現在のままでは廃会もやむなし、と決った。次回は四月六日、渋谷勤労福祉会館において午後より甲斐会の名称で開くが、その会の席上、参加者の意向を参考にした上で今後を考え、廃会にするか、存続させるか、又他の人々に世話人をやっていたかどうか決めたい、とのこと。投稿です。なお参加したい方は誰でも参加できますが、維持費として二百円用意して下さい。

★弥栄之郷共同体

春のワークキャンプのお知らせ

島根県の山の中に、日本でも有数の過疎地である弥栄村がある。そこに私たちが入りこんで三年。みようみまねで始めた百姓も、なんとか、サマになりだした。今では、一町の畑と一町の田んぼと、三百羽のニワトリ、五千本のシイタケ栽培、そして今年から、りんごの栽培も始めるつもりである。

部落の人たちは、私たちのことを「キョードータイ」と呼んでいる。私たち「キョードータイ」は部落向けの新聞『ガマの穂』を毎週発行し、その中で、共同体直販への参加の呼びかけをしている。また部落の人との共同耕作も始めており、今年はさらに休耕田を利用して共同耕作地を拡げていこうと思っている。

弥栄の冬はながい。そして春は「キョードータイ」のキャンプとともにおとづれる。きみの汗でかやに荒された休耕田をみのり豊かな畑につくりかえよう！ きみのキャンプをつくろう！

▼ひにち

* * * * *
一九七五・三・一〇―四・一〇

第一期 三・一〇―三・二四

第二期 三・二五―四・一〇

(原則として各期ごとに参加して下さい)

▼ところ

弥栄之郷共同体(やさかのさと)きょうどうたい

島根県那賀郡弥栄村三里は―38

TEL〇八五五三八(石見安城局)―五五八六

▼あし

①山陰線浜田駅下車(または広島から広電バス又は国鉄バスで浜田まで)

②浜田から石見交通バス安城行で終点下車

③バス終点より徒歩一時間半

▼ひよう

生活費として一日¥三〇〇(米一日三合持参者は¥二〇〇円)

▼持参品

作業着上下、長靴、軍手、毛布又は寝袋、懐中電灯 etc (雨に濡れます、着換を充分に！)

▼連絡先

コミュニケーション百人委員会

大阪市東成区玉津二丁目東成玉津郵便局留

◎詳細、申込みはコミュニケーション百人委員会までへキャンパ参加者のためのしおりを送ります。

★編集室

★直接行動というものを最近考えている。アナキズムとアナルコサンデカリズムを考える時、この言葉が抜けているような気がする。そういえばこいつが基本なのだろうが、最近のアナキズムには直接行動というものがあまりみられない気がする。

(山本二夫)

★最近、勝田吉太郎の「アナキスト」や、小松隆二の「日本アナキズム運動史」などのアナキズムの概説書を読んだ。思想や運動についての知識があまりない私には、とてもおもしろかった。だが、それぞれの著者のアナキズムに対する姿勢、またその生き方が気になった。勝田は、アナキズムは、人間にとって本質的な問題を提起しているが、もはや時代おくれだ、というようなことを書いていた。

私たちは、アナキズムを単なる歴史の現象と考える歴史家や、これをめしの種にしている知識人と、一線を画さなければならぬと思う。

アナキズムの本質的な理念のひとつは、知的労働と肉体的労働

★なぜアナルコ・フェミニズムか

先月号の広告から係は資料を集め読んでいます。既に米国の「つむじ風」は資料を送ってきました。アナルコ・フェミニズムより環境汚染、組織論等優先すべき課題は幾つもあるとの意見を耳にしますが、それならそう主張する人がまず資料を公開し所論を問うべきだと思ふのです。昨年末の忘年会の席で老アナキストと話したことがあります。彼は「僕等が運動していた頃は妻を娶とか子供を持つことは考えなかった」と語りました。妻は病に臥し兄は飢えに泣く」とは壮士の愛吟した詩の一節ですが、万人の幸福を求めて闘うアナキスト自身が幸福を味わわないで斃れた例は多いのです。その一半の事情は活動家の年齢が三十歳以前と若く、また思想的には「家庭破壊論」のような意見が受入れやすく、禁欲主義がバトスの源泉になったからだろうと推定されます。この方面ではセルゲイ・ネチヤエフの「革命家のカテキズム」などが心情に訴えるものでしょう。ネチヤエフのタルチュフ的な性的放縱はそれ自体革命の意味を担っているとも思いますが、ここで一つ家族制の検討も含めて、ご意見を寄せて下さい。勿論、結婚は個人的(性的関係として)な側面と社会的(家庭として)側面をもっています。キエルケゴールはこの事情を「人は結婚によって社会に参加する」と述べました。性的なものを個人的、隠微なものとして、臭い物にふた式に取扱うのは、その裏返しとして無定見なボルノを認めることになりす。わが日本ではまだまだ性的なものを個人的裁量範囲に押しこめて、その文学的な表現でさえ公的にはわいせつ罪として処断する傾向があります。チャタレイ夫人裁判、サド裁判等はこの部類です。つまり国家は性を抑圧することによって、血の純血と家族制の温存を計る訳ですが、それは経済的搾取と平行して行われるのです。投稿をお待ちしています。(締切日 四月二〇日)

の統一、「労働」と「あそび」の統一である、と私は考えている。もちろん分業一般を否定しない。分業は必要である。だが、知的活動と肉体的活動の分業は別である。それは、分業というより、人間の人格の分裂であり、支配関係を伴うものである。

アナキズムをめしの種にしている大学教授や知識人——資本家、政治家、職業的芸術家などともに搾取階級に属している——には、もつと厳しい態度を取らなければならない、と思う。人間における知的活動と肉体的活動の分裂を容認するかどうかを、問わなければならない。

もちろん、このような問いかけは、私たち自身に返ってくる。「リベルテール」紙上で知識人批判を展開したいと思っているのだが、その能力と知識がない。それより自分の姿勢が確立されていないのが問題だ。(江藤敏和)

★春だ。アスファルトジャングルでも風の吹くたびに春が舞上ってくる。個人的にはドイツ語を学習している。ランデウワが読みたくて取りついてみたが、童話の語学力では追いつかない。彼の心の優しさは原文でないと判らないと思う。友人に速成法を訊ねると微笑して最初からの積み重ねですと事もなげに答えた。そこで両方を気のむくままにやっている。発見したのはランデウワの神秘観とファン・ダイン(カブリーター運動家)のが同じで共にルネッサンスを否定している事だ。(莫空人)

エンリコビルでの定例活動

◎共学読書会(初心者の方のみ)

第二、第四日曜日午後一時より夕方迄

◎エスベラント語学習会(興味のある方だれでも可)

毎週水曜日午後七時より

東京都大田区西蒲田7の61の4 ☎(七三五)一二四六 国電蒲田駅より徒歩3分

★リベルテール・サロン

■水道橋東口下車徒歩2分「コージ」 ■毎週火曜日 午後6時より8時頃まで ■どなたでもどうぞ ■一九七五年一月十四日から再開